

trivia ■皮膚科のトリビア■ 159

本欄は、浅井皮膚科クリニックのホームページに連載されている「皮膚科のトリビア」を紹介させていただくものです。学会・研究会などで聞きししたことをその都度まとめ、連載されています。ご意見等ございましたら、ぜひ小誌「声」欄までお寄せください。

成長期毛脱毛症と 休止期毛脱毛の総説

第53回横浜北部皮膚科臨床懇話会から（平成29年6月8日）

成長期毛脱毛は、円形脱毛症、抗がん剤や放射線による脱毛症、癬痕性脱毛症に分類される。休止期毛脱毛症は、急性休止期脱毛症（出産・発熱・薬剤・体重減少）、慢性休止期脱毛症（パターン型脱毛症：男性型・女性型）に分類される。抗癌剤による脱毛症はアントラサイクリン系（ダウノルピシン・ドキシソルピシン）を含む多剤併用療法やタキサン系薬剤では必発。投与後2～3週間目から脱毛が始まり、抜け始めると4～5日で全体の70～80%が脱毛する。「成長期毛の抜け毛の先はゴボウ状に萎縮していて、休止期毛の抜け毛の先は毛根が丸くなってくっついていているらしい。機会があれば顕微鏡で観察してみよう」。

結節性裂毛症 (Trichorrhhexis nodosa)

第53回横浜北部皮膚科臨床懇話会から（平成29年6月8日）

毛皮質線維が露出・断裂して、筆先を向かい合わせたようになる毛幹の形態異常。後天的には過度のヘアケアやドライヤーのかけ過ぎが誘因となることが多い。頭頂部に粗毛をきたすこともある。肉眼的に頭髪は乾燥し光沢に乏しく、頭皮から2～5 cm

のところに白色点状物が混在し、同部位で容易に切断される。誘因となるヘアケアを中止することで、約半年で症状は改善する。「成人のアトピー性皮膚炎患者で、頭頂部の粗毛をみることがあるが、頭皮の過度の搔破も同様の症状をおこすらしい。毛の一本一本をみるようにしよう」。

消化管常在真菌が アレルギーの危険因子か

第66回日本アレルギー学会学術大会から（平成29年6月17日）

腸内細菌と同様、腸内真菌もアレルギー発症・増悪の因子として注目されてきた。乳幼児期における抗菌薬の投与は腸内細菌叢の変容（dysbiosis）を介してアレルギーの発症リスクを高めると考えられているが、これに真菌が関与している可能性が示された。消化管に *Candida albicans* が長期間定着するモデルマウスでは、肥満細胞の活性化が生じ消化管粘膜の透過性を亢進させ、食物抗原の取り込みを増やし、結果として感作を促進すること、消化管、皮膚、関節におけるアレルギー性炎症を増悪させることが報告された。

「乳児期の抗菌薬投与は長期的な弊害があると考えたほうがよいのかどうか、上気道炎は別にしても膿瘍疹や中耳炎の治療はどうするのか、悩ましいところだ」。

トリビア (trivia) = 3を意味するtriと十道を意味するviaでもとは三叉路の意。古代ローマで三叉路が多かったことから「どこにもある場所」。そこから転じて「瑣末なこと」となり、今では雑学的知識、豆知識、などを意味する言葉として定着している。

浅井俊弥

Asai, Toshiya

浅井皮膚科クリニック

(〒240-0013 横浜市保土ヶ谷区帷子町1-14)

ホームページアドレス:

<http://www.asai-hifuka.com>

Resolvinによる炎症の収束

第66回日本アレルギー学会学術大会から (平成29年6月17日)

Resolvinはω3脂肪酸であるEPAに由来する脂質メディエーターで、生物が持つ恒常性維持に必要な炎症収束機構に関わると考えられている。喘息モデルマウスにResolvin E1を投与すると気道への好酸球、リンパ球の集積を減少させ気道過敏性を抑制し、炎症を収束させることが示された。

「EPAにはResolvin, DHAにもProtectinという抗炎症性脂質メディエーターが存在するようだ。魚油が皮膚のアレルギー性疾患にも有効ということに単純になるかどうかは、今後の研究を待ちたいところだ」。

ハチ毒によるアレルギー免疫療法

第66回日本アレルギー学会学術大会から (平成29年6月18日)

欧米ではハチ毒をアレルギーとした減感作療法が30年以上前から施行されていて、有効性(80~95%)と安全性が示されているが、本邦ではいまだに保険適用がない。ハチ毒アレルギーがあると、最終刺症から数年以内に再刺症を経験すれば40~70%の確率で全身症状が出現する。ハチ毒アレルギー患者はアウトドアワーカーや養蜂業者に多く、特異的IgE抗体の検査で、林業従事者の12.9%、電気工事従事者の1.9%、建設

業従事者の5.6%、養蜂業従事者の27.4%がハチ毒アレルギーと診断され、アレルギー免疫療法の適応と考えられた。

「Hollister-Stier社(USA)の治療用エキスを輸入して行っているそうだ。この会社のプロダクトリスト(<http://www.hsallergy.com/products/>)にはさまざまな診断用、治療用アレルギーがあって、驚いた」。

不感発汗は皮溝におこる

第66回日本アレルギー学会学術大会から (平成29年6月18日)

ワセリン、ステロイド外用薬、保湿剤を健常部皮膚に塗布する前後で、微量発汗の定量をImpression mold法を用いて行った。安静時の有毛部皮膚における発汗は不感発汗として皮溝に分泌され、温熱誘発による汗は自覚できる汗で皮丘に開口する。6 mg/cm²のワセリン、ステロイド軟膏、保湿薬と18 mg/cm²の保湿薬を健常部皮膚に外用したところ、発汗滴数が7日後にはそれぞれ2.3倍、1.8倍、3.9倍、6.0倍に増加した。炎症性皮膚疾患の治療として保湿薬を用いることで不感発汗を増やし、角質水分量を増加させることは有用な方法である。

「慢性の炎症性皮膚疾患の治療において、汗が多ければよいかという点、そうでない症例も経験する。ただ、微量発汗を定量するという方法は非常に興味深いと思った」。